

## とうせい すえしつ 陶製（須恵質）の井戸枠

平城京左京（外京）三条五坊三坪・奈良市大宮町一丁目

**調査の概要** JR奈良駅から北北西に約0.3kmの場所で行った調査です。平城京の中では、左京三条五坊三坪という宅地に該当しており、平城宮から東南東へ約2kmの場所に位置しています。発掘調査の結果、奈良時代のもと思われる井戸1基と建物跡2棟の遺構が見つかりました。中でも井戸は今まで類例のないもので、まず径約2.0m、深さ約2.7mもの大きな深い穴を掘り、その底に直径約93cm、高さ112cmの巨大な須恵質の井戸枠を設置していました。須恵質の井戸枠の上段には、木組の井戸枠があったと思われますが、抜き取られたためにか、ほとんど残存していませんでした。平城京内で使用されていた一般的な井戸枠は、上から下まで木組であることを考えると、このような井戸枠は特別な例であると言えるでしょう。

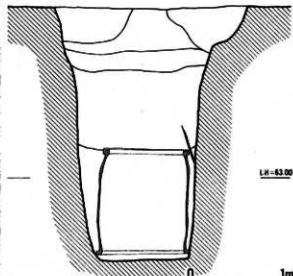
調査地付近の地盤は、粘土と砂礫が交互に堆積する比較的強固な地盤になっています。今から千二百年以上も前の奈良時代に、このような地盤の固い場所に、こうした大きな深い穴を掘る作業は、おそらく困難を極めたことでしょう。また、壊れやすい巨大な焼き物の井戸枠を、生産地から運搬してきて、さらに深い穴の底にうまく設置する作業についても、相応の技術がなければできなかったことと推測されます。

このほかに、弥生時代末期から古墳時代初期にかけての溝の跡も確認されました。溝の中からは当時の土器が大量に出土しました。

**須恵質の井戸枠** 大きさは、上部は直径89～98cm、下部は直径92～96cm、高さが108～112cmの円筒形をしています。縁部（上下にある帯部の縁）が6cmと分厚いですが、胴の部分は1.5～2.5cmと比較的薄く作られています。このような巨大な井戸枠が平城京内でも一般的に使われていたとは考えにくく、特別注文による生産であったものと思われます。この井戸枠の発見は焼き物の歴史において重要なだけでなく、施主の身分を知る上でも大きな手がかりとなるでしょう。



発掘調査地点



井戸の断面図

**須恵質の井戸枠の作り方** 表面に残された様々な痕跡を観察してみると、この須恵質の井戸枠がどのようにして作られたのか判るので、順を追っていきましょう。

① まず、型枠を用いて、下側の縁帯部を作ります。この時、粘土がくっつかないように型枠内に布を敷いてから粘土を詰めます。この時の布の痕跡が縁帯部の側面に残っていました。

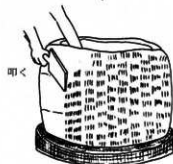
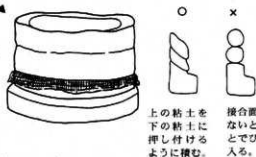


(型枠の材質はわかっていません)

② 円形状に作った縁帯部分を型枠に入れたまま少し乾燥させます。



③ ある程度粘土が固くなったら、この上に帯状の粘土を積み上げて胴部を作っていきます。粘土のつなぎ目は微妙な凹凸が残っていることが多いので、この痕跡を観察すれば、何段分積み上げたかが判ります。この製品は、4〜5段以上積み上げたようです。



④ 積み上げる過程において、板で表面を叩いて粘土をのばしながら、円筒形に作り出します。外表面だけを叩くと変形するので、当て具を内側に当てます。この時に粘土の外表面についた痕跡を「タタキ目」、内側についた痕跡を「当て具痕跡」と呼びます。

この段階で型枠をはずす。



⑤ 表面を叩いた跡、タタキ目を消すために板状の工具で内側と外側の表面を軽く削って整えます。

⑥ 最後に、上端に厚めの粘土を積み上げて縁帯部を作ります。板状の道具で形を整えてから、なめし皮か布で横方向にナデて仕上げます。

⑦ 出来上がり。

